

伊勢市教育研究所

<http://www.ise-mie.ed.jp/~kenkyusyo/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

E-mail:kyo-kenkyu@city.ise.mie.jp

平成 26 年 1 月 16 日 発行

伊勢市教育研究所

第 23 号

# たより



平成 25 年度学びのグレードアップ総合推進事業（学校教育課・教育研究所連携）

## 伊勢市の子どもたちの 「学力向上を考える研修会」を終えて

年の瀬の 12 月 26 日(木)、伊勢市の学びのグレードアップ総合推進事業の取組の一つとして、学校教育課と教育研究所が連携し、平成 25 年度全国学力・学習状況調査（以下、学調）の結果に基づいた研修会を開催しました。各小中学校からは管理職・研修担当者・教務担当者の皆さんに参加いただきました。

講師として、三重県教育委員会事務局小中学校教育課の伴充指導主事と竹内誠学力向上アドバイザーをお招きし、学調の問題分析・結果分析、授業のあり方等について熱く丁寧にお話しいただきました。

### 【伴 指導主事のお話から】 「全国学力・学習調査の問題分析・結果分析について」

#### 今、求められている学力

「PISA 型読解力」という言葉を耳にするようになって久しいですが、話題はそこからでした。グローバル化が進む中、「今、世界で求められる学力は、読んだものを理解するだけでなく、得た情報を自分の考えをもってどう活用するか」だと伴さんは話されました。



例えば算数・数学は、これまでの答えを求める教科から、データを見て自分でどう判断できるかが求められる教科になってきているということです。大切なのは、数字のもつ客観性をどう生かすことができるかなのです。また、理科であれば、科学的知識や根拠を利用し、自分でどう結論を導き出すか、自分で判断できるかが問われるのです。伴さんは、PISA 型科学的リテラシーは防災教育と密接に結びつくと話されました。

#### <学力の三要素>

- ①基礎的・基本的な知識・技能
- ②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等
- ③主体的に学習に取り組む態度

学校教育法(第 30 条 第 2 項)には、上記の内容に結びつく「学力の三要素」が記述されています。新学習指導要領にはその内容が反映されています。さらに学調は全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果の検証と

改善、学校における教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることを目的に実施されているのです。平成 19 年度の実施から今年度で 7 回目の学調（平成 23 年度は未実施）、私たちはその意義を再確認する必要があります。

## 「学調のもつ意味」

伴さんが掲げられた項目は10ありましたが、特に興味深い内容を5つ挙げます。

- ◆ 「学調」は「テスト」ではなく、課題を把握するための「調査」である。
- ◆ 高学年の担任や調査教科の担任に限らず、全ての教職員のために実施している。
- ◆ A問題で求めているのは、実生活で常に活用できることが望ましい事項である。
- ◆ B問題で求めているのは、知識・技能等を実生活に活用する力である。
- ◆ 調査問題には、学習指導上、特に重視される点や身につけるべき力を具体的に示すメッセージか込められている。(問題を見れば、授業改善のポイントが見える！)

活用の視点は「調査問題の活用」「子どもの解答の活用」「調査結果の活用」の3つです。

## 調査結果を活用した授業改善へのプロセス

- ① 調査結果から課題を把握…【子どもの解答類型に注目する！】
- ② 課題のあった問題に関して、出題の趣旨や学習指導要領における領域・内容を確認  
…【全国学力・学習状況調査解説資料を参照する！】



### [県全体の傾向]

- 算数：正しい番号は選択できているものの、その理由を式と言葉を使ってどう説明したらいいかが分からない傾向がみられる。  
(A問題・B問題に共通、中学校も同様の傾向)
- 国語：目的に応じて資料を読み、分かったことを的確に書く・自分の考えを具体的に書くことの正答率が低く、無回答率が高い傾向がある。

国全体や県全体の傾向を把握しつつ、自校の子どもたちの正答率が低かった問題や解答類型に注目し、校内研修で情報共有することも大切な取組です。

- ③ 該当する領域・内容等が該当する部分を教科書で確認…【教科書に立ち返る！】

### [教科書活用例]

- 算数：旧教科書と現行教科書を比較することで、新学習指導要領で追加された内容が分かる。  
(例)東京書籍 小学校算数5年生下「百分率とグラフ 比べ方を考えよう」

- ④ 具体的な授業展開…【補完の必要があるかどうかを判断し、関連資料を活用する】

[授業アイデア例(国立教育政策研究所)、ワークシート(県教委)、授業改善事例集(伊勢市教育委員会)]

### [県教委の提案]

- 課題となっている領域・内容の授業展開の工夫・改善
- 日常の授業において、目標(めあて、ねらい)の提示と振り返る活動の工夫と改善

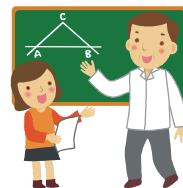
特に今回の学調の結果から明らかになってきたのが、「目標の提示」と「振り返る活動」についての教師と児童・生徒の意識の差です。教師が「目標を提示している」「振り返る活動を取り入れている」と回答している率よりも、児童・生徒が授業でそれがなされていると感じている回答率が低い傾向にありました。

「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の重視」については学習指導要領の総則にも明記されています。これを定着させることが、児童・生徒の学習意欲の向上と自主的に学ぶ態度を育むことにつながり、結果的に学習内容の確実な定着に結びつくというものです。

## 目標の提示と振り返る活動

普段の授業の中で、改めて次のことを意識しながら実践する必要があります。

- ① 目標は具体的な内容にする。
- ② 目標ははじめに板書で提示し、最後まで消さない。
- ③ 授業の終わり(5分間程度)に目標達成を確認・評価する。



伴さんは、「振り返る活動」に関して、① キーワードを意識して文章化させること、② ノート指導を工夫したり「振り返りシート」を用意したりすること、③ 指導者は、目標(めあて、ねらい)が達成されているかを評価し、補充学習や家庭学習につなぐことを提案されました。特に「キーワードを意識して文章化すること」は、子どもたちに授業の目標を意識しながら授業に参加させることになるだけでなく、「書く力」をつけることにもつながる取組であるといえます。

何れの取組も継続することで成果が得られると考えます。学校全体で取り組み、校内研修等で子どもたちの姿をもとに検証するというのも一案です。

## 【竹内 学力向上アドバイザーのお話から】「今、授業で求められること」

### 調査結果から考える



竹内さんからは、「子どもたちの実態をつかむこと」の大切さについて具体的に話していただきました。まず投げかけていただいたのは、「学調の正答率に振り回されていないか」ということです。全国の結果よりもポイントが高い・低いということよりも、解答類型にこそ注目すべき重要な内容が含まれているということなのです。子どもたちの解答類型に即して左記のようなことを提示されました。(以下、算数を中心に)

解答類型を丁寧に分析することで、授業の定着状況や様々な子どもたちの姿を把握することができます。

解答類型		解答内容	考えられる指導
1	}	「正答」もしくは「根拠が考えられる誤答」	この解答群の児童・生徒は振り返りや復習などにより正答に導くことができると考えられる。
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9	→	根拠が考えられにくい誤答	この解答群の児童・生徒には基礎・基本の定着を図る必要があると考えられる。
0	→	無解答	(中には完全な正答を目指して書かなかった場合も)

0.75+0.9・・・正答「1.65」  
 「2」「0.165」、3「0.65」、4「0.84、8.4、84」、5「0.084」と誤答している子どもたちについては、授業の中で関わることで正答枠に入っていく。」と竹内さん。

また、「無解答」の中にも、「できなかった。」「しなくなかった。」「アバウトに答えるのがいや。」というパターンが考えられると指摘されました。学調の調査結果(解答類型)には授業の工夫改善に役立つヒントがあることが分かります。さらに次の例を示されました。

どちらのシートがこんでいるかを調べる  
 A : 人数 12 人、面積 6 m<sup>2</sup>    B : 人数 8 人、面積 5 m<sup>2</sup>  
 ㊤ 12÷6=2    何を求める式であるかを理解  
 B 8÷5=1.6    していないと解けない。

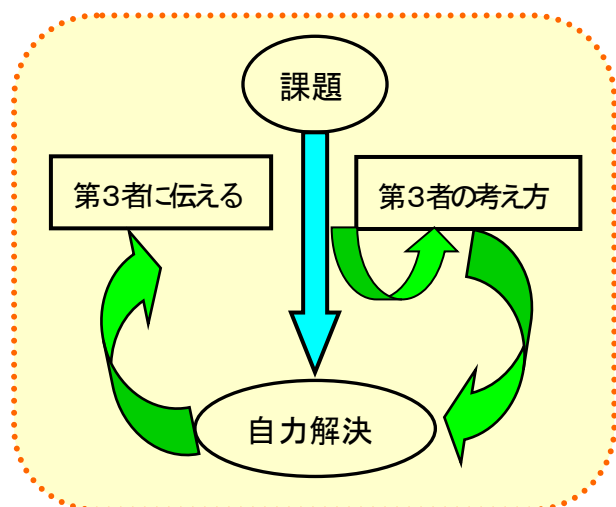
竹内さんは、「子どもたちの理解の中で、どこの鎖がはずれかかっているのか、はずれているのか、その見極めが大事である。」とも話されました。その子が正答できないのは、計算でひっかかっているからなのか、考え方でひっかかっているからなのか。その見極めの力が教師には求められるのです。

また、「各教科の学習用語を正確に用いること」の大切さにもふれられました。日々の授業の中で、大切な学習用語を省略して話したり書いたりしていることがなかったか、振り返る機会をいただきました。



### 求められる力

子どもたちは出された課題を自力で解決する力を身に付けていかなければなりません。竹内さんは下記のプロセスを示されました。



さらに、このプロセスを実現するために有効な授業のヒントとして挙げられたのが次の項目です。

- ◆ペアや小集団での学び合い
- ◆考え方を説明する場面
- ◆教科書に出てくる説明等への投げかけ
- ◆ノートなどに考えをまとめる など

これまで、授業の中で取り入れてきた内容ですが、学調の結果から明らかになった子どもたちの学力・学習状況をふまえて、改めてその意義を見直す必要があると考えます。

最後に竹内さんが提示された「授業の流れ」を紹介します。

#### 【授業の流れ(案)】

- 1 本時の「目標・めあて」をおさえる
- 2 本時の学習課題を提示する
- 3 課題解決に必要な振り返り
- 4 課題解決のための見通し
- 5 自力解決
- 6 ペア学習・小集団学習等の学び合い
- 7 学び合いの中から得たものを参考に自力解決
- 8 思ったこと、考えたことを伝える⇄聞く
- 9 「目標・めあて」についての「振り返り」



今回の研修会を終えて再確認したいのは、伴さん、竹内さん両方から提案いただいた「調査問題の活用」・「子どもの解答（解答類型）の活用」・「調査結果の活用」という3つの活用に取り組むことの大切さです。校内研修の機会などに学校全体で3つの活用に取り組み、目の前の子どもたちの学習状況を把握し、授業の工夫と改善・教育活動の改善に向けて話し合うことに大きな価値があると考えます。新たな視点として「解答類型から子どもたちの姿を把握すること」の大切さも示唆いただきました。

また、教師が「目標と振り返り」を意識して授業を進めること、子どもたちに授業の「見通しとキーワード」を意識させることの重要性についても考える機会をいただきました。日々の取組の中で、見つめ直したいことをたくさん提案いただき、有意義な時間になりました。